

書評 Yehouda Shenhav, The Arab Jews : A Postcolonial Reading of Nationalism, Religion, and Ethnicity.

著者	田村 幸恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	50
号	5
ページ	79-85
発行年	2009-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007172

Yehouda Shenhav,

The Arab Jews : A Postcolonial Reading of Nationalism, Religion, and Ethnicity.

Stanford : Stanford University Press, 2006.
xiv + 263pp.

たむら ゆきえ
田村 幸恵

はじめに

本書は、アラブ系ユダヤ人、特にイラク出身のユダヤ教徒を中心に彼らのイスラエル国家への統合過程から、シオニズムが内包する問題性を捉えると同時に、エスニシティ問題の見取り図が描かれている。著者は、現在イスラエルのテル・アヴィヴ大学で社会学を教えており、自身もイラク出身者としてアラブ系ユダヤ教徒の文化的固有性を主張しつつイスラエル社会での地位向上の運動 [Warshwsky 2007; Shabi 2008] に深くかかわり、アラブ系ユダヤ人を包接しつつ差別や差異化が続く原因はシオニズムの性質に由来していると論じている。その批判を土台に、シオニズムをナショナリズムとして捉え、また、国家政策全体にみられる差異化の再生産がパレスチナ人との関係性と密接に結びついている点を視野に入れたエスニックな「境界」の設定を説明している。

タイトルにもなっている「アラブ系ユダヤ人」^(註1)については、日本では白杵 (1998, 17-19) で紹介され、イスラエルでアラビア語圏文化を保持する者、あるいはその子孫を指している。しばしばアラブ系ユダヤ人はミズラヒーム^(註2)と呼称されるが、本書では意図的に別の呼称を用いている。本書はシオニズム批判にとどまらず、アシュケナジームの対置である「ミズラヒーム」という語を避け、究極的にはイスラエル国家の「神話」であるシオニズムを乗り越える方向性を示そうとも試みる。ショハット (E.

Shohat) が提唱するように、アシュケナジームに対置される形でこの言葉が現代的に「創り出された」文脈と語の非政治性を踏まえ [Shohat 1999, 5-20], より広い地平でのエスニック集団の包接システム確立の可能性を模索していることが窺われる。

アラブ系ユダヤ人研究の蓄積は歴史が浅いが、シオニズム批判、あるいはその思想が持つ人種的囲い込みを当のユダヤ人が批判し、それに沿って研究は発展してきた。アラブ系ユダヤ人の先行研究は、ユダヤ人側に限定しても、共産党系の立場からブラックパンサーまで様々な視点による蓄積がある。本書は「シオニスト国家イスラエル」神話の分析と、丁寧な言説分析による論証をもってシオニズムを批判しようとした点で従来のシオニズム批判と大枠の論点を共有している^(註3)。しかしながら、上にあげたようなシオニズムへの批判的研究蓄積に対する検討が体系的に整理されていない印象を受けた。

議論の前半は、従来から指摘されているシオニズムの排他性や人種差別的側面だけでなく、後半で扱われるアラブ圏からの移住者への補償問題と密接にかかわる導入部、その後の議論の文脈として歴史的なシオニズムの展開が述べられ、後半の第3～5章で本書の主要な議論が展開される。アラブ系ユダヤ人がパレスチナへ移住した歴史的背景からシオニズムのコロニアルな側面の拡大を説明したことは、その分析枠組み自体は新しい主張ではないが、従来の理論上の構造や言説分析 [Shohat 1997] に比して、実証的という点で大きな進歩を遂げている。

著者は従来のシオニズム批判の研究同様にヨーロッパ起源のシオニズムを「本流」とする「公的なシオニズム」を「方法論的ナショナリズム」^(註4)にちなんで「方法論的シオニズム」という言い方であらわしている。「方法論的シオニズム」を理解するためには宗教的な紐帯の重要性を検討し、ナショナリズムのhybrid (混成的) な側面と、通常のナショナリズム論に加えて包接の装置を通し、イスラエルで疎外されているパレスチナ人との共通点を提示する。

本書の構成は以下のとおりである。

序章 歴史は故郷から始まる

第1章 アラブ系ユダヤ人の「発見」

- 第2章 アバダーンでの遭遇——コロニアリズム、ヨーロッパ中心主義そしてユダヤのオリエンタリズム——
- 第3章 アラブ系ユダヤ人は如何にして宗教的かつシオニストになったのか？
- 第4章 アラブ系ユダヤ人とパレスチナ人の共通性——住民交換，帰還権，補償の政治学——
- 第5章 アラブ系ユダヤ人とシオニストの歴史記憶
- 終章 方法論的シオニズムを超えて

I コロニアリズム的背景
——hybridity論という装置——

序章では、イスラエル社会の排他性と包接の論理が並存している状況を理解する鍵として、ナショナリズムとエスニシティ（公的な「イスラエルのユダヤ人」）の構築、宗教のイスラエル社会における役割の説明がされる。第1，2章では、後半の各3章でこの3要素の絡み合いが、統合・同化と移住に伴った財の喪失への補償要求問題，パレスチナ人と共通するアラブ系ユダヤ人の伝統の「喪失」を通じて描かれるための文脈が提供されている^(註5)。年代的には委任統治期から1960年代までを扱い、第1章では、委任統治期前から半ばにかけてユダヤ教徒の宗教的基金を集めるシャダール (shadar)^(註6)が、アラブ地域のユダヤ人を「発見」した時点を、アラブ系ユダヤ人とシオニズムの「遭遇」として設定する。シャダールは1920年代から40年代に、イラクとイランの国境にあるAbadanにおいて入植地への労働者斡旋の媒介となった。このシャダールを通じ、シオニストがアラブ系ユダヤ人を移住させた歴史がひも解かれる。アラブ系ユダヤ人の雇用と移住の歴史には、コロニアルな環境下のシオニズムの発展過程とAbadanの職員の言説が引用され、労働力として移住したアラブ系ユダヤ人に対する蔑視的な対応を知ることができる。

しかし、第1～2章の中では、イラクでの「迫害」(farhūd) 以外のアラブの歴史的状況にはほとんど

触れられておらず、送り出し側の状況はわかりにくい。本書で想定されている読者がアラブの歴史に関心があっても、移住の要因となる経済的・政治的状況は一般的な迫害の事実以外は想起し難い。本書において歴史叙述は主眼ではないものの、議論の中心となる「疎外された者＝パレスチナ人」との関係性や、アラブ世界と自らの所属の双方における「離散」について地域に固有な歴史的条件や当該社会の排他性などの示唆がほしいところであった。イスラエルを核として移住し、惹きつけられあるいは選択的に「イスラエル人」となった条件にもほとんど言及されていない。上に述べた文脈説明にとどまり後半の議論にかかる問題提起はないが、アラブ系ユダヤ人の視点でシオニズムの歴史そのものを立て直すべき、という主張に実質的な論証を加えている点は読んでいて肯首できる点が多かった。

第3章では、建国後イスラエルに大量に移住したアラブ系ユダヤ人が「宗教的」である所以をシオニズムへ同化する手段とみて、シオニスト「本流」に影響された脱アラブ化と表裏一体の選択でもあると著者は観察する。宗教性の強さ（ここでは世俗化していないという意味で使われている）をhybridity，すなわち混雑性に関する論理として、本書ではLatour (1993, Chap.3) を引用し当てはめている。宗教がナショナリズムに組み込まれる時、一方が他方を排除するのではなく相互に作用して社会の凝集性を高めるために作用するというLatourの示す見解を適用した説明は相応しく、アラブ系ユダヤ人の位置を浮き彫りにしてみせる。コロニアルな差別^(註7)が隠され、宗教で統合した社会という前提は、シオニズム「純化」^(註8)の作用と並存したという仮定のもとに、著者はhybridityという論理によって「遅れた」アラブ系ユダヤ人は「前近代的」宗教に結びつけられ「純化」の一環として「宗教的」であり続けたと主張する。著者によれば、アラブ系ユダヤ人はその中東における歴史的継続性やアラブ文化的背景を捨てない限り、ヨーロッパ系ユダヤ人とはエスニックな相違に阻まれ同化されない。それは、使用する言語をヘブライ語に変え、アラブ的な文化を消し去るという過剰適応に至る。社会的統合としてhybridity

による説明は著者の主張に合致するが、冒頭でナショナリズムに宗教が果たす重要な役割の分析を期待すると肩すかしをくわされる。第1～2章のように具体的な事例に即した主張には議論の検証がみられず、エスニック集団としての差異化と記憶の断絶を証明するには理念上の説明にとどまっているため説得力も弱まっている。

後半では、建国後のパレスチナ難民との住民交換^(註9)と私財の補償問題から、シオニズムの歴史におけるアラブ系ユダヤ人の矛盾した位置づけを明示している。第4章は、第2章同様に「方法論的シオニズム」の問題性の場を、出身国に残した私財の補償問題に的を絞る、パレスチナ人との「交換」の補充者であるアラブ系ユダヤ人の純化と同時並行の差異化の問題を扱い、エスニックな関係や難民問題の研究にとって新たな視角を提供している。第5章ではイスラエル内政の問題としてアラブ系ユダヤ人の政治活動をWOJAC (World Organization of Jews from Arab Countries) を中心に描き、またイスラエルに在住していないWOJACメンバーとパレスチナ人との交渉、それに対するイスラエル外務省を含む「公的」シオニストの言説の中での「アンビバレントな立場」を我々に提示してくれる。

本書が最も意義深いのは、シオニズムにおけるユダヤ人の「救済」からのみにとどまらず、アラブ地域における庇護からも疎外されているアラブ系ユダヤ人の位置 [Shohat 1997; 2006] を、事実としてイスラエルの歴史に浮かび上がらせようとした点である。アラブ系ユダヤ人は、委任統治期の1942年に起こったユダヤ人襲撃事件だけでなく、50年代以降、アラブ地域を離れなくてはならない状況におかれていた。中東イスラーム地域を覆ったアラブ・ナショナリズムからも、そして移住したイスラエルのシオニズム——著者によればシオニスト・ナショナリズム——からも疎外されている。こうした事態の発端はイスラエル建国時の戦争であった。それに続く占領状態を経験しているパレスチナ人にとっても状況は類似している。アラブ諸国家からパレスチナ人として疎外され、あるいはアイデンティティを埋没させ、故郷においては文字どおり疎外されて彼ら

の歴史や文化、経済的地位上昇の機会を剥奪される状況におかれている。双方が偏在的に疎外されている状況を示唆するという意味では歴史的にも社会的にもアラブ系ユダヤ人はパレスチナ人と結びつけられていることに改めて読者は気づかされる。

II 内なる流浪

——ナショナリズムとシオニズム——

著者が主張した「宗教性」とナショナリズムの関係を読み解く枠組み説明の中で特徴的なのは、シオニズムをひとつのナショナリズム (Zionist Nationalism) として捉え、そのナショナリズムは「ユダヤ人ナショナリズム」(Jewish Nationalism) と同義とみる点である。特徴的でありながら混乱を招くのは、ナショナリズムにみられる負の側面、すなわち社会の多元性を損なわせ、国家政策のために画一的制度維持の側面に集中した論点の展開にみられる。分析概念として多元性が必要であるとするなど、ナショナリズム論の展開というよりは、これまでの社会学におけるナショナリズム論争をシオニズム分析に当てはめるために、hybridityという装置やポスト・コロニアル理論を援用しているようにみえる。ナショナリズムの研究という観点からは、ケドゥリー (Elie Kedourie) らのナショナリズムの再構築における蓄積 [Kedourie 1971] を踏襲し、ゲルナー (Ernest Gellner) らが批判したナショナリズムの本質主義的傾向 [Gellner 1994] がシオニズムにある点を見逃さずに、近代化とともに弱体化すると想定された宗教の持つ意味に着眼してはいる。とはいえ、シオニズムを「ナショナリズム」としてエスニックな境界の問題を論じるならば、そのシオニズムが核となって移民を惹きつけた側面、アラブ世界にみられた社会・政治制度に比して体裁だけでも近代的に整えた側面やアラブ系ユダヤ人自身のパレスチナ人などに対する蔑視や反発に注目しないことに疑問を感じざるを得ない。

著者がよってたつ社会学の蓄積よりは、むしろオーソドックスな社会学分析のように機能的であり非歴史的な結論を導いてしまっているため、読者は著

者がナショナリズムを越えた地平を開くモデルを模索しているのか、エスニック集団の紐帯を整理しようとしているのか論点が見えなくなる。著者の主要な関心事は、本書でしばしば使われるシオニスト・ナショナリズムが社会的現象として「創造される」際の矛盾の分析であり、そこに比重が置かれているためである。

著者は、方法論的シオニズムにみられるヨーロッパ中心概念に戻ることなく、他文化（ムスリム社会の文化）との差異を設けない「統一した歴史」の創出の必要性があると強調する。その上で、東西および発展と後進の対立、シオニスト「ナショナリズム」にみられる脱アラブ化を乗り越えた時に、ユダヤ人性とアラブ性が表向き2つの極となっている状況（代替案としては、イスラエルのユダヤ人というアイデンティティとアラブ人というアイデンティティ）を逃れることができるとポスト・シオニズム議論の出口を指し示す。この主張は、唐突な提案となっているように見えるが、最初の方法論的シオニズムの包摂と排除の代替として、著者が提示した答えである。

中東における現代のナショナリズムの様相を、ネーション論に一線を画すことを意図し、宗教の持つ影響力を文化論ではなく政治社会学的枠組みとして考える立場に立ち、現実から抽出しようとする姿勢は窺うことはできる。しかし、著者の考察は、通常ナショナリズム論と議論の地平が異なり、エスニシティの問題に範囲を定めてよりよくシオニズムを変えるための方策を論じており、シオニズム改定論であるということが出来る。終章ではナショナリズムとして「差別」の問題をなくすこと、パレスチナ占領を伴うイスラエル国家ノーマル化の論理にすり替わっているのである。ナショナリズムを開かれたものにし、多文化性を賞賛するポスト・コロニアル論者を引いているが、方法論的ナショナリズムの仕組みを成立させている条件の分析が第3章では従来どおりの「シオニズム」の排他性にいきついており、終章で述べるような地平を広げる鍵は読者に渡されない。

しかしながら、後半で建国後の住民交換案とその

案に絡む財産補償の問題をめぐるアラブ系ユダヤ人の主張とイスラエル国家の政策の分析は著者の主要論点のひとつ、疎外のからくりとhybridity議論の枠組みがかみあってくる。アラブ系ユダヤ人とパレスチナ人の双方がディアスポラの状態におかれたことによって抱えた共通の文化的歴史的「喪失」を明かす。エスニシティの否定の内実を知ることができる。次の第5章ではアラブ系ユダヤ人が、公的シオニズムのポグロムおよびホロコーストの歴史叙述に自らの立場をどう位置づけるか、今度は集団行動の分析を通じて検討している。ここではイスラエルの中でのエスニシティの問題が密接に歴史とかかわっている点を読者に示してくれている。アラブ系ユダヤ人団体の主張を中心に、同化と違和の混在状態を事実に基づいた検証と分析により英語で発表する論者は少ない。したがって、本書がこれまでの思想的なシオニズム批判論が取り上げなかった事象そのものを取り出し光を当て、歴史的に変遷する過程を示した意義は大きい^(註10)。また第4～5章でWOJACを取り上げ、イスラエル社会におけるアラブ系ユダヤ人とパレスチナ人との関係性も検討している。

イスラエル国家の将来を再考する新たな理論の地平を立てている視点も、WOJACを軸に考察した点で重要な功績といえる。いくつかヘブライ語による著作が発表されているようだが [Behar 2008]^(註11)、評者は直接論に触れていないので識者からのご指摘・紹介があればと思う。WOJAC設立と機関の終焉に至る経緯に光が当てられることで、ナショナリズムの影を浮かび上がらせ、さらに鏡のようにパレスチナの難民帰還の問題を映し出した点も注目に値する。第5章では、WOJACの存在そのものが、彼らの「イスラエルにおける正当な権利」として、ユダヤ人の歴史のルーツがヨーロッパに限定され得ないという主張の展開とともにアラブ系ユダヤ人の歴史認識の必要性を掲げ、イスラエル移住の際に失った財の返還・補償という具体的な要求をあげる。またこの要求自体がイスラエルにおけるパレスチナ難民の帰還と結びついていることが明らかにされ、かつシオニズムに対するある種の提言で文章は終わっている。

イスラエル国内でシェンハブはアンチ・シオニスト的とされているようだが、少なくともシオニズムの存在が必要と信じられた歴史やある時代におけるユダヤ人国家の希求性は肯定されている。また、シオニズムはコロニアルな環境で生まれたものの、それ自体はコロニアリズムとは別物とみる、と終章で記している。よって、本書はシオニズムの正常化の範囲をこれまでにないほどに広げてみせるが、ポスト・シオニズム論の範疇は超えていない。ナショナリズムを超えるためにネーションに収斂しないことを提唱するが、議論の実体は結局「シオニスト・ナショナリズム」であるという奇妙な提案になっている。

利用されているのはヘブライ語文献と英語のものが大半を占め、アラビア語の資料がみあたらない。適当なアラビア語資料が不足しているのは本書のテーマの微妙さから避けられないのかもしれないが、多少奇異な印象を受けた。イスラエル内部からのシオニズム批判が、有機的なパレスチナーイスラエル関係への示唆を含んでいる点は、本書の様々な不明瞭さを補っている。翻ってアラブの内部から、こうした宗教が政治的道具として活性化され内なる分裂を増幅させる装置になっていることや、アラブ社会内部の差異化に対する内部からの率直な批判や研究をみる機会が増えていくことを願う。

(注1) 本書は、概ねイラク出身のユダヤ人を対象にしている。国の英雄だったアラブ出自者の伝記からアシュケナジーム（主に欧米出身者）かミズラヒーム（東洋系という意味）かということ問うべきではない、としたイスラエルの役人の話をひいて、イスラエルにおけるアラブ的アイデンティティ＝エスニシティの否定を著者は問い直す（pp.5-7）。

(注2) イスラエルにおいてはイディッシュ語話者のアシュケナジームとラディーノ語を話したセファルディームに大別されるが、そのセファルディームに中東などイスラーム圏出身者ミズラヒームを含むこともある。ミズラヒームの中にはイランやクルド出身者も含まれる。

(注3) ナショナリズム自体とシオニズムの関係は、

言及されていないが、白杵（1998 167-183）にあるシャマースの論争を参照。

(注4) 方法論的ナショナリズムは、ごく簡単にいえば、社会学的分析概念として近代社会において、国家は社会の範疇と一致した政体であり、近代社会は国民国家を必要とするという理論である。1970年以降にギデンズ（Giddens）やスミス（A. Smith）らの批判を受け、近年ではホブズボーム（Hobsbawm）の著書などでもナショナリズムの本質主義的捉え方は批判されている。著者も社会と国家の関係はいまだ国民国家の成立と社会の関係性にはっきりとした普遍的な理論はないという立場に立っている。本書でも地域社会の文脈、歴史的な文脈によってそれぞれ理論が改変される必要があるとしている。本書が依拠している社会学・ナショナリズム論における原初・本質主義的な理論に対する最近の批判はBeck（2003, 435-468）。

(注5) もともと、本書は*British International Journal of Middle Eastern Studies*などで発表された個別の論文を土台にしているため議論の整合性がない印象は免れない。

(注6) 18世紀頃に発生した自発的な基金集めに始まった離散ユダヤ人のパレスチナ移住支援の動き。英語ではemissaryと訳され、増えつつあったパレスチナの「聖地」在住者援助の資金を聖典研究の場を中心に集金し、辺境のユダヤ人コミュニティを労働力として移住させるシオニストの雇用斡旋機構の先遣隊のような働きをした。

(注7) 著者は、コロニアルな被差別者をアラブ系ユダヤ人と位置づけているので、差別者は西欧出身のユダヤ教徒でシオニスト、ということになる。本書の大部分で、コロニアル＝西欧ではなく、ある種の差別的な観点を指し示していると思われる。しかし、第2～3章で展開されたイギリス委任統治期にかけてのアラブ人蔑視に対するシオニストの批判的見解を示す部分とは矛盾しており、コロニアルな差別主体者は著者自身もはっきりと区別していない可能性が高い。

(注8) 純化というのは、ナショナリズムを扱う際に言語の分野で発生し、そもそも純粋な言語というのは存在せず、公用語として統一されたとする文脈から宗教にも当てはめられることが多い。ユダヤ教の純化

は世俗化と表裏一体で進められ、世俗化したシオニズムがナショナリズムとして集団間で有機的なつながりとするため純化した宗教要素を混入しつつ、非宗教的なナショナリズム（ここではシオニズム）を強化させるhybridity（混在性）の働きを補完するものとして著者は捉える。

（注9）トルコとギリシャで行われたような一定地域の異なるエスニック集団の混住する地域を、自国の多数派に見合うように移住させて交換する政策である。イスラエルという住民交換とは、難民となったパレスチナ人と、移住してきたアラブ系ユダヤ人を指す。1949年から50年にかけて実際にパレスチナ人の一定数の受け入れや住民交換の類似案がイラク政府との間で話し合われたが、パレスチナ人の土地・財の国家による接収の問題が絡んで実現しなかった。住民交換は事実上行われた状態というのがイスラエル政府の立場なので、それぞれが残してきた財の喪失は補償がされず、そのことを契機にアラブ系ユダヤ人の中では議論が起こっていく。パレスチナ人と交換される一種の「難民」としての扱いは、彼らの失われた歴史や文化、そして出身地とのつながりで縁取られた鮮明なシオニズム像とその中の影として、アラブ系ユダヤ人の位置を指し示している（pp.118～122）。

（注10）著者以前にもアラブ系ユダヤ人に関する研究は散見され、日本でも10年前に同じ視点を有した著作〔白杵 1998〕が発表された。同書はミズラヒームの立場については2人の知識人論争を紹介するなど、本書よりわかりやすい。ヘブライ語でもいくつかあり、英語ではShohat（1997）らの先行研究がカルチュラル・スタディーズの文脈で1990年代後半に紹介している。さらに、事実即した政治分析ではChetrit（2000）がイスラエルにおけるアラブ系ユダヤ人の位置づけを考察している。

（注11）本書の書評をほかで発表したビハールは、イスラエルで出版されたChetrit（2004）を紹介している。また、同書評ref.14のKarif（2006）もミズラヒームの政治的動向を述べている。

文献リスト

<日本語文献>

白杵陽 1998. 『見えざるユダヤ人』 平凡社.

<外国語文献>

- Beck, Ulrich 2003. "Toward a New Critical Theory with Cosmopolitan Intent." *Constellations* Vol.10, No.4 : 453-468.
- Behar, Moshe 2008. "Mizrahi, Abstracted : Action, Reflection, and the Academization of the Mizrahi Cause." *Journal of Palestinian Studies*. Vol.37, No. 2 : 89-100.
- Chetrit, Sami Shalom 2000. "Mizrahi Politics in Israel : Between Integration and Alternative." *Journal of Palestine Studies* Vol.29, No.4 : 51-65.
- 2004. *The Mizrahi Struggle in Israel ; Between Oppression and Liberation, Identification and Alternative, 1984-2003*. Tel Aviv : Am Oved.
- Gellner, Ernest 1994. *Encounters with Nationalism*. Oxford : Blackwell.
- Karif, Moshe 2006. *Hamizrahit : Sippura shel haKeshet haDemokratit HaMizrahit vahaMa'avak haHevratit be Yisrael, 1995-2002*. [ミズラヒーム：民主ミズラヒ・レインボーのストーリーとイスラエルにおける社会的公正への闘い 1995-2002]. Tel Aviv : Globes.
- Kedourie, Elie 1971. *Nationalisms in Asia and Africa*. London : Weidenfield and Nicolson.
- Latour, Bruno 1993. *We Have Never Been Modern*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Shabi, Rachel 2008. "Another Side to the Jewish History." *The Guardian* 27 June.
- Shohat, Ella 1997. "Columbus, Palestine and Arab Jews, Toward a Relational Approach to Community Identity." In *Cultural Identity and the Gravity of History : Reflections on the Work of Edward Said*. eds. B. Parry et al. New York : Lawrence & Wishart : 88-105.
- 1999. "The Invention of the Mizrahi." *Journal of Palestine Studies* Vol.24, No.1 : 5-20.

—— 2006. *Taboo Memories, Diasporic Voices*. Durham : Duke Univ. Press.

Warshwski, Michakel 2007. “Half-Price Citizens :

Sephardic Jews in Israel.” *Le Monde Diplomatique* (English Ver.) 11 (July).

(津田塾大学国際関係研究所)